

昭和三十三年十二月例会

十二月五日(土)午後一時より

於 京大文学部第一講義室

ハーバード大学の周辺(スライド使用)

衣笠 茂氏

ハーバード雑感(スライド使用)

萩原 淳平氏

私は一九六三年八月十五日に出発しハーバード大学でアメリカの一学年間学び、四年六月二日ボストンを立ちました。帰途、ドイツのボン大学にハインツヒ、オルブリヒト兩教授を訪ね、約半月間滞在しましたが、その間にボン大学と京大東洋史研究室との学術交流の件について打合せを行いました。また、その際イギリス、フランスなどのヨーロッパ諸国の大学、博物館、史跡などを訪ね、南廻りで八月十九日無事帰国致しました。

本日は、これらのうちで私が主として過しましたアメリカについてお話ししたいと思います。しかしアメリカの中国研究につ

いては、かつて宮崎市定教授が『史林』第四五巻六号に「アメリカにおける中国研究瞥見」と題して、一般事情について詳しく述べられており、またハーバード大学の楊聯陞教授も『史泉』第二五号に「欧米における東洋研究の現状と展望」と題して、研究者とその研究課題について述べておられますので、私としてはその後の変化を多少お話しするとしても、主として私が接しましたハーバードでの経験を雑感と題してお話しすることに致します。

私が招かれたのは、正式にはハーバード燕京学社(Harvard Yenching Institute)で、一つの財団であります。その所長は、ライシャワー教授が駐日アメリカ大使となられてからは空席で、中国文学の専門家であるバクスター博士が所長代理をしておられました。私の滞米中に、中国・日本の社会人類学の専門家であるベルゼル教授が所長に就任しました。この研究所に客員研究員計画(Visiting Scholars Program)と云うものがありまして、一九四五年以来、毎年日本、中国(台湾)、韓国から数名づつの学者を招聘して、ハーバード大学で自由に研究させてくれるシステムになっておりま

す。これまでに京大文学部からもアメリカ文学の菅泰男教授とインド哲学史の服部正明助教がこのプログラムで行っておりま

す。私の行った年は、日本から五人(外に二年目の人が二人)、中国から二人(同一人)、韓国から三人(同一人)が来て居りました。専攻科目は東洋史はもとより英米文学・人類学・経済学・法学など多方面にわたっておりました。これらの人々がハーバード大学の中で、それぞれの専門に応じて研究施設を利用し、或は適当な講義に出席します。

御承知のように、ハーバード大学は一六三六年創立で、アメリカの大学の中でも最も古い伝統ある大学です。イギリスのオックスフォード大学などと比べると、古さの威圧感はありませんが、伝統の良さは感じとれます。野生のリスが飛びかう手入の行きとどいたキャンパスを中心に、殿堂のようなワイドナー図書館や、その向い側にそびえる大学の教会などは美しい眺めです。学生の間に大学所属のポリスマンが歩いているのも、なれば不自然に見えませんが、建築物は古いものも多いですが、図書や設備は良くとのっております。学生には学部三年までの義務的な寮生活があり、ハー

バードの良い伝統を培っているように思われました。毎週月曜日にはR・O・T・Cの予備将校訓練が行われるため、学生の一部は軍服姿で登校しますので、その時だけは世界状勢の緊迫さを感じますが、それ以外は甚だ環境に恵まれた大学と云えましよう。

さて、私はハーバード大学の Eastern Languages 部門の蒙古学、中国学部門の講義に出席しました。蒙古学はクリーブス (Cleaves) 教授、中国学は楊聯陞教授が講義をされております。私の出席したのは殆んど大学院の講義で、学生は多い講義(演習・講読が主体)で十二・三名、少ない講義で六名でした。そのなかには、アメリカ人は勿論ですが、中国人、フランス人などもおりまして、なかなか国際色も豊かですが、また各出身国のこれまでの伝統的業績を活用しながらの討論は甚だ効果的のように思われました。私もクリーブス教授に請われて三回講義をしました。私は客員でしたので、殆んど傍聴しておりましたが、一般学生にとっては宿題が大変多く、しかも授業は一時間単位ですが、月・水・金と週三日同じ講義があり、かなり緊張し

た授業が続きました。従って、学生の読書力はかなり早い速度で進んでいるようですが、一面では、果して自分の好む研究をする余裕があるかどうか危懼の念をいだいた程です。

さて、これらの講義や、学会に出席したうえで、アメリカの東洋学の現状はどうかと云うことについても一言触れておきましょう。アメリカの東洋学には二つの方向があることを強く感じました。一つは本来ヨーロッパ流と思われませんが古典にじっくり取り組む派であり、他の一つは、現代の政治・社会を研究の対象とする派であります。後者は、第二次世界戦争後、アメリカ自体

がアジアに政治的関心を深めたことに直接原因すると思われまますし、また研究費も多額に支給されるためでもありましようが、現代史研究が特に若い人の間に相当強力になりつつあります。しかもこれら二派の間に溝があると思われる程、各々が独自の方向に向って歩んでいるように見えました。たとえば、アメリカの東洋学を代表する二つの学会においても、A.O.S. (American Oriental Society) は前者的傾向が強く、A.A.S. (Association for Asian Studies)

は後者的傾向が強いとされていきます。

それにしても、中国・日本研究などは後者が強力である事はうなづけるとして、蒙古古典を研究している学生ですら、「自分は将来必ずしも学者になるとは限らない、政治的社会的に自分の活躍する場さえ与えられれば、そちらに向うかも知れない」と教授と論争していました。大学院の博士課程をほぼ終り、博士論文を書くばかりになっている学生の言葉であったのには一驚をききました。恐らく若い人の中には、古典研究に対する考え方と、現代的政治意識との間に、矛盾を感じているものもあるのが現状だと思えます。

しかし、この溝もやがて埋められ、総合的な研究体制がうち立てられる日もそう遠くはないでしょう。すでに一九六一年には Mongolia Society がインディアナ大学を中心として出来ました。恐らく、最初は現代史の研究から出発したと思われまます、今日ではポツェ教授らの古典派をまじえ、ラティモア教授(現在イギリス)などを含む国際的規模に成長し、会員は一九六四年現在、婦人九名を含む七九名の多数にのぼっております。研究内容も現代史から宗教、

言語など多方面におよびますが、同協会の出版物の一つには、有名な蒙古古典である「蒙古源流」の、一部ではありますが、英文翻訳さえ出ております。

そのほか、古典研究としては、クリーブス教授の「Boke Eike」の翻訳と註釈やモスタイルト神父の「モンゴル・マニエスクリプトの研究」、セロイス神父の明代馬市研究など数多くすすめられております。

このように見て来ますと、アメリカの蒙古学は、将来益々その層も厚くなり、それにともなつて、すぐれた業績も続々発表されるようになると思われます。(萩原)

東洋史の萩原氏と同じ時期をハーバード大学古典学部にごした衣笠氏は、ボストン市内および郊外にあるアメリカ独立戦為の史蹟をスライドを通じて紹介した。

とくに、戦争勃発直前、イギリス守備隊の出勤をアメリカ人たちに告げまわつた愛国者ポール・リアア(Paul Revere)の足跡を辿りながら、ボストンのノース・チャーチレキントン、コンコード、バンカー・ヒルなど保存のゆきとどいた史蹟を映写し、同時にこの地方でおこなわれた数日間の戦闘の経過を説明した。(司会者記)

昭和四十年二月例会

二月六日(土)午後一時より

於 京大文学部第一講義室

アフガニスタンにおもむいて

(スライド使用)

桑山 正進氏

アフガニスタンでは先史時代の遺跡がすくない。ムンデイガクとナディアリとは彩文土器そのほかの特徴からみて、この国が先史時代からインドやイランと深いつながりがあったことをしめしている。インド・アリアンが紀元前第二千年期のなかごろ大移動してインドにはいったというが、經由地と考えられるアフガニスタンでその跡をいまだみない。アケメネス・ペルシアの支配下にあつたともいうが、考古学的に立証されていない。ただバクトリア期以後が比較的わかつてきた。それも古銭学のほうからの解釈によるところがおおきい。考古学からはまだなにも言えない。

首都カーブルに常設研究所をもつフランスはアフガン各地で各時代にわたつて業績をあげている。ごく最近ではスルフ・コタ

ル神殿の発掘をおわつて、その東方にあるクシャン後期の城塞を掘りつつある。その一方では、クンドゥズ南郊のエフタルの群集墳やカーブル南方のグルダラのストゥパを調査している。伝統的なバクトリア踏査も、コクチャ川がオクサス川と合流するところでアリハヌム都城址にゆきあたり、これから本格的発掘にはいるであろう。ドイツは、K・フィッシャーが個人的に踏査して小論文を各所に発表したが、大きな調査隊を送りこんでいない。それにくらべてイタリアはISMEOから調査隊を出し、ハイバク近辺の調査、ガズニーにおける発掘をはじめとして各地で踏査測量をおこなっている。隊長のG・トゥッチはタシュケルガン北郊にテベが集中している場所をバクトリアの中心とみなし、発掘を計画しているらしい。アメリカ隊はタシュケルガンの西のマザリシャリフ付近で旧石器時代の調査をしている。

水野清一教授を隊長とする京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査隊の考古美術班は、ジェララバードのフィハナ窟、ハイバクのオゾル・スム窟を測量調査してから、六三年にはクンドゥズの

西イリアン中央高地のケマブー河上流地域には、未探検地区がのこされており、文明との接触をほとんど持たない山地パプア族が住んでいる。京都大学西イリアン学術

バラヒッサール、ドゥルマン・テベを発掘した。ドゥルマンテベは六五年度調査をもって完了する。また六四年からはあらたにチャカラク・テベを掘りはじめた。ドゥルマンはクシャン中期から後期にかけて、チャカラクは六四年度現在クシャン後期以後イスラム以前という年代が与えられている。近年みづからの手で基礎ができたインド考古局は、カピシ・ペグラムの発掘計画をもっている。土器を比較的重視して報告するインド人のウィラー的発掘に期待したい。その理由は、ほかの外国隊がいまにいたってなお「宝もの」一辺倒たるうらみがあり、この地方の考古研究の停滞原因のひとつはそこにあると考えるからである。なおアフガン自身による考古調査はいまのところ全く想像外である。(桑山)

ニューギニア高地人(スライド使用)

石毛 直道氏

探検予備踏査隊の一員として人類学的調査を行なった山地パプア諸部族の日常生活・慣習等をスライドを使用して紹介されたのち、部族のもつ意義についての考察を中心としての話しがあった。カポーク族・モニ族・西部ダニ族・ウフンドニ族の四部族とも、父系相続・夫方居住・父系出自をまもり、サブ・クランを単位とする族外婚を行なうという基本的な点では一致している。部族を意味づける第一の点は、一部族は他部族と異なることばを使用している言語集団という点にある。つぎに、部族により相異のあるのは社会組織の独自性である。また、一部族は一定範囲のテリトリーを占有することも部族の特長である。物質文化においては、部族間の差異はすくなく均一性をもつ。物質文化で部族ごとの差異のあるものは、テントリーの自然状態に関係あるもの、社会組織に関係ある品目においてである。山地パプア諸部族においては、政治集団としての部族の意義がほとんどないことに注目される。

学界消息

読史会

三月例会

三月十三日(土)午後一時

蘭学の歴史的意義

四月例会

四月十日(土)午後一時 於 京大文学部演習室

沖繩史研究入門

小葉田 淳

西洋史読書会例会

四月二十四日(土)午後一時 於 西洋史研究室

イギリス労働運動の体制内定着化 中山 章

西洋史読書会第一二回春季大会

一九六五年四月二十九日(祝)午前一〇時より

於 薬友会館

プロイセン世襲財産問題

―帝制期ドイツにおける土地政策の動向― 於 薬友会館

フリーエ対オーエン

豊永 泰子

―思想の比較と比較史―

堀井 敏夫

社会思想史におけるホップズの位置に

ついて 長沼忠兵衛

シンポジウム『現代史のとらえ方』

「社会民主主義」の成立と展開

飯田 収治

アメリカ帝國主義理念の一考察 今津 晃  
サライエブオからキューバまで  
—現代史における戦争と革命— 中山 治一

日本考古学協会 昭和三十九年度大会

群馬大学文学部

三十九年一〇月二四日〈臨時総会と研究発表〉

大分県早水台遺跡出土の石英製石器について 芹沢 長介

東山型ナイフの編年—新庄盆地東縁部の先縄  
文遺跡第二報— 加藤 稔

高知県不動カ岩屋洞穴の発掘調査 岡本 健児・江坂 輝弥

八ヶ岳南麓における縄文中期土器の編年 笹津 備洋・片岡 鷹介

藤森 栄一・武藤 雄六

縄文中期の住居内における火使用の変遷  
—南信・信濃境諸遺跡における所見— 桐原 健

那覇市山下町第一洞(鹿化石)発掘報告 多和田真淳・高宮 広衛

日本石器時代における岩偶の変遷 江坂 輝弥

山梨県中央自動車道発掘調査概要(昭和三八  
年度) 仁科 義男・久保 常晴

山本寿々雄・関 俊彦  
京都市梅ガ畑出土の銅鐸

田辺 昭三・佐原 真  
京都深草弥生式遺跡の調査(第一次) 網干 善教

北関東弥生式文化への試論—赤城山南麓及び  
渡良瀬川流域を中心に— 周東 隆一

東京都八王子発見の方形周溝特殊遺構 大場 磐雄

茨城県出島村風返、稲荷塚前方後円墳の発掘  
調査 榎部 慈恩・平沢 久

二五日〈研究発表〉  
前方後円墳の造出の一序列について 三木 文雄・大塚 初重

上総土気舟塚古墳の調査 梅沢 重昭

和歌山市岩橋千塚の調査 末永 雅雄・森 浩一

宝塚市雲雀力丘古墳群の調査 石野 博信

会津大塚山古墳の発掘 伊東 信雄・伊藤 文三

宮城県志田郡松山町亀井開横穴第二次調査  
概要 加藤 孝・氏家 和典

剣菱形杵葉をとまなう馬具の性格 小野山 節

出雲国忌部の玉作工房跡と出雲玉作  
大場 磐雄・寺村 光晴

夷俘文化考 小岩 末治  
昭和三十九年平城宮跡調査概要 榎本 杜人・横山 浩一

木村 豪章  
上野・金井瓦窯跡の調査 久保 常晴・坂詰 秀一

愛知県渥美郡田原町大アラコ古窯趾群の調査 久水 春男・小野田勝一

小野崎城趾第一次発掘調査 大森 信英

石川県羽咋市次場遺跡調査概要 高畑 勝吉・浜岡盛太郎

吉岡 康暢・橋本 澄夫  
〈公開講演〉  
古墳文化と仏教文化 尾崎喜左雄

一九六四年に於けるイラク・イラン調査団の  
発掘 曾野 寿彦

二六日 見学

## 会 告

### 会費（誌代）の改訂

すでに皆様のご承知の通り、近時の物価上昇は異常なものがあり、本誌の印刷費も連年値上がりし、本年度はふたたび対昨年度比約二割の値上がりをみるにいたしました。本会会費は、一九六一年秋以来据置きのみまで、この間の印刷費の値上がりは、冗費の節減と人件費のきりつめによってかろうじて吸収し、昨年度はまた頁建の若干の減小によってきりぬけてまいりました。しかしながら本年度は、そのような弥縫策をもってしてはもはや吸収しえない事態にたちいたりしました。評議員会および理事会におきまして、慎重に審議いたしました結果、昭和四十年五月（四十八巻三号）より、会費を次の通り値上げすることといたしました。物価上昇により研究条件が悪化しつつある折柄、「史林」の会費もまた値上げせざるを得ないことは、まことに心苦しいのでありますが、止むを得ざる事情を何とぞご了承下さいますようお願いいたします。（なおこれとともに、建負は年間九六〇頁〔毎号一六〇頁平均〕に復します。）

旧会費	年額	一、二〇〇円
新会費	年額	一、五〇〇円

旧定価	一号当り	二四〇円
新定価	一号当り	三〇〇円

追而、すでにお払込済みの会費は、本号より、「史林」一号あたり二五〇円の割にて計算いたします。なおまた会費を滞納の方には、至急ご納入で下さいますよう、とくにお願い申しあげます。

### 役員・委員の新選出・異動

評議員会および理事会におきまして、次の二氏が新たに理事に選出されました。

会 田 雄 次

豊 田 堯

また、宮崎市定理事（前理事長）は、理事を辞任されたので、本会顧問に推薦いたしました。

また、委員望田幸男氏は三月三十一日をもって辞任し、代って小貫徹氏を委嘱いたしました。

### 会員名簿の贈呈

かねてより御協力をいたしておりました「会員名簿」がようやく出来ましたので、お届けいたします（会員無料、

非会員頒価三〇〇円)。何分にも約一〇年ぶりの作成でありますので、種々失礼な間違もあるうかと存じます。お気付の節は、お手数ながら本会まで御連絡下さい。

昭和四〇年五月

## 史学研究会

会員各位

新入会ご希望の方へ

新入会ご希望の方は、住所(「史林」送先)氏名・専攻・お勤め先(在学学校名)および配本開始希望巻号を明記の上、会費(年間一、五〇〇円)を添えて、当会宛お申込下さい。(但し大学、図書館等公共機関の場合は、会費は後払でも可。)なお、お申込のさい、バックナンバーを併せてお申込下さって結構です。会員の方には、バックナンバー送料は当会にて負担いたします。なお又、ご送金は、なるべく振替口座(京都五一五五番 史学研究会)をご利用下さい。

### 委員会だより

◇「会告」所報の通り、昭和四〇年度本号より、本誌もついに値上げせざるを得なくなりました。近時の物価高はとどまるところを知りませんが、本誌の誌代も、ついにこれにより切られた形です。どうぞ、ご協力をお願いいたします。

◇「会員名簿」長らくお待たせいたしました。ようやく出来いたしましたので同封しました。アンケートをいただきましてから時日も経過しておりますので、お勤め先など異動もあるのではないかと存じますが、お手数でもご連絡下さい。以前にお届けしましたのは昭和三〇年一月(本誌三八巻六号とともに)です。約一〇年ぶりとなるわけです。昭和三〇年といえば、本誌が戦後の混乱から漸く立直って、隔月刊を確立した年です。それから一〇年、本誌はおかげ様にて毎年六冊、今迄五七号を刊行して参りました。この間、しかし会員の総数は微増にとどまっています。この事態をどうみるか、委員会としても、じっくり検討したいと考えています。

◇前号西田直二郎顧問の計報につづいて、本号にも岩井武俊顧問の計を報ぜねばならなくなりました。本会章創期の功労者の計を相ついで報ずることはまことに哀惜のきわみであります。私ども本会の運営と本誌の編集に一層の努力をかたむけて、先輩の遺志を継承し発展させてゆきたいと存じます。

史 林 (第四八巻第三号)

一九六五年四月二十五日印刷  
定価三〇〇円  
一九六五年五月一日発行

発行所 史学研究会

京都市左京区吉田本町  
京都大学文学部内

理事長 田村実造  
振替京都五一五五番

印刷所 中村印刷株式会社  
京都市下京区西七条御所ノ内中町五〇